

琉球諸島出土「高麗系瓦」の製作技法と年代 ：グスク瓦の基礎的研究

石井, 龍太

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究

(巻 / Volume)

40

(開始ページ / Start Page)

141

(終了ページ / End Page)

187

(発行年 / Year)

2014-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00009986>

琉球諸島出土「高麗系瓦」の製作技法と年代

— グスク瓦の基礎的研究 —

石井龍太

一、はじめに

琉球諸島と韓半島の交流は先史時代まで遡る長い歴史を持つ。考古学の研究成果では、楽浪土器、高麗青磁、梵鐘等の輸入されたもの、また瓦、沖繩産陶器といった技術導入により生産された可能性があるものの存在が指摘されている。興味深いことに、これら韓琉交流はしばしば琉球諸島の歴史的転換期に目立って存在している。貝塚時代後期（弥生・平安並行期）、グスク時代、近世琉球期初期の遺跡から、前述した様々な産物や技術が琉球諸島へともたらされた。こうした現象が何を意味するのかは、重要な論点と言えるだろう。

本稿で取り上げる瓦もまた古くから注目されてきた。グスク時代に位置づけられ、琉球諸島におけ

る初めての本格的な窯業生産品ともされる。また表面に施された「癸酉年」の記銘年は多くの研究者が取り上げ、議論が続けられてきた。瓦の年代の問題は、王権にまつわる政治的動向だけでなく、琉球諸島における窯業生産、そして瓦葺きという中華的建築文化の到来時期についても重要な示唆を投げかける問題である。

本稿ではグスク時代の瓦について取り上げるが、その内包する要素、問題は極めて幅広い。そこで「高麗系瓦」と呼称される瓦資料を対象に、製作技法と年代に課題を絞って検討する。その手段として、沖縄本島出土資料と遺跡の分析、さらに韓国の珍島龍藏城出土資料との比較を行い、先行研究を踏まえつつ考察する。

なお琉球諸島の瓦には呼称に関する議論がある。グスク時代における瓦群は諸特徴から二分され、発掘調査報告書をはじめ「高麗系瓦」「大和系瓦」と呼称されてきた。また近世期に位置づけられる瓦は「明朝系瓦」と呼称されてきた。何れも推察される系譜に基づいて設定された名称である。しかしその後の資料増加や研究蓄積を踏まえ、「大和系瓦」は「九州系瓦」(山崎二〇〇〇…三九六)¹⁾、「明朝系瓦」は「琉球近世瓦」(石井二〇一〇他)という新たな呼称が提案され、議論もある(上原二〇一三)。「高麗系瓦」の呼称については「高麗瓦」と呼ばれたこともあり、韓半島の高麗時代の瓦との紛らわしさが指摘された(渡辺一九九〇…一三二)もののこれまで根本的な議論はない。こうした研究状況を踏まえ、本稿ではグスク時代に沖縄本島のグスクを中心に用いられた一群の瓦の総称と

して「グスク瓦」を設定する。その上で、従来「高麗系瓦」と呼称されてきた瓦資料に対して本稿でも「高麗系瓦」という呼称を用いることとする。韓半島の高麗時代の瓦は「高麗瓦」と呼称する。また本稿では考古学的手法から瓦分析を行うが、瓦の部分名称は専門性が高く、研究者によって一致しないことも多い。本稿では使用する部分名称をあらかじめ設定しておくこととする(図1)。

二、先行研究

グスク瓦の研究は古くから行われ、また研究テーマは多岐に渡る。本稿では設定した課題である製作技法と年代を中心に概観してみよう。

二一、製作技法

高麗系瓦への注目は、瓦そ

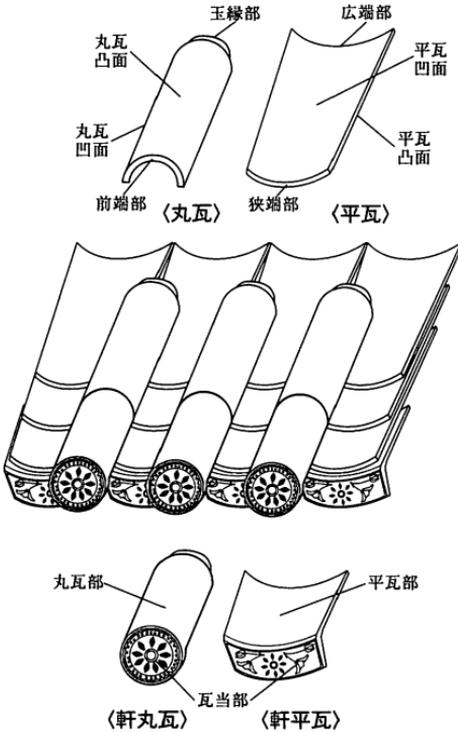


図1 瓦の部分名称

れ自体より記された文字（図2）や瓦当紋様に偏りがちであったが、製作技法に関する研究も考古学者たちによって行われてきた。

大川清氏は琉球諸島の瓦に関する最初の体系的な論考をまとめており、現在も参照すべき点が多い（大川一九六二・三九六―三九八）。高麗系瓦の製作技法については、平瓦が桶巻き作りであること、丸瓦平瓦等の凸面に見られる紋様が押型によるものであることを指摘し、また確認される資料から製作用具の規格復元を試みている。

浦添城跡、首里城跡の高麗系瓦資料を観察し、考古学の観点から詳細な製作工程の復元を試みたのは関口広次氏であった（関口一九七六・四五―四八）。分析対象は破片資料ばかりであったが、計測から完形状態の全形を推計し、さらに製作技術についても触れている。平瓦は桶巻き作りであり、模骨（瓦の型）には分割用のガイドとなる突帯棒が付くこと、模骨に布を巻き叩き板で表面を叩き締めること、叩き板には綾杉状の紋様があることを指摘する。また丸瓦は葉瓶形の有段式模骨を使用していること、軒丸瓦の瓦当部は木製の范から作られ、丸瓦部と瓦当部を直接接合する印籠継ぎがなされると推察されること、瓦当部が長方形を呈する軒平瓦が存在し、印籠継ぎを行い、裏面に粘土を補強することを指摘する。

下地安広氏は浦添城跡の発掘調査によって出土した瓦資料を分析し、製作技法について興味深い指摘を行っている（下地一九八六）。平瓦の素材として使用される粘土板は二枚であり、最初に型に巻

分類		模式図	打捺文等の特徴	
高麗系平瓦	打捺文1類 「癸酉年高麗瓦匠造」	a 	右枠に「癸酉年高」、左枠に「麗瓦匠造」がある。銘は鏡文字で天地も逆。枠は縦長で、縦が約6cm、横は左枠が約3.4cm、右枠が約2.9cm。叩き板の幅は6.7cm前後とみられる。	
	打捺文2類 「格子文+瓦?」		右枠に「格子文」、左枠に「瓦?」がある。格子文は縦4本、横3本の線で構成。「瓦?」は鏡文字か?。天地逆?。枠は縦が約2.8cm、横は右枠が約3.6cm、左枠は約3.8cm。やや横長。叩き板の幅約7.6cm前後とみられ、他よりも幅広い。	
	打捺文3類「大天」	a 	左枠に「大天」、右枠は空白。枠は縦長で、縦約6.2cm、横は右枠が約2.8cm、左枠が約3.1cm。叩き板の幅6.4cm前後とみられる。文字は正位。羽状文の端部に横位の並行二本線がある。新設種。	
		b 	銘の配置や文字枠の大きさ、叩き板の幅等は上記3類aと同じだが、羽状文の端部に横位線が無い点で異なる。	
	打捺文4類「大天+月?」		左枠に「大天」、右枠に「月?」。枠は縦長で、縦約6.2cm、横は右枠が約2.9cm、左枠は不明。叩き板の幅も不明。文字は正位。	
	打捺文5類「天」	1 「天」のみ	a 	四つの枠のうち、右上の枠に「天」をおき、他の枠は空白。枠は正方形に近く、縦約4.0cm、横は右枠が約3.6cm、左枠の幅は不明。文字は正位。叩き板の幅は不明。羽状文の端部に横位線が1本ある。
			b 	銘の配置や文字枠の大きさ等は上記5類1aと同じだが、羽状文の端部に横位線が無い点で異なる。新設種。
2 「天」に不明文字が重なる			四つの枠のうち右上に「天」をおき、さらにその上に他の文字が重なる。重ねた文字は縦に三文字確認されるが詳細は不明。文字枠の大きさ等は上記5類1と同じとみられる。「天」文字は正位。新設種。	
その他		左右二つの枠があるが空白となるもよう。枠は他に比べて小さく縦2.3cm×横2.8cmで、正方形に近い。叩き板の幅は不明。		

図2 叩き板紋様の種類

きつけた粘土板の両端に上から二枚目の粘土板の端を合わせるため、粘土板の接合痕が右巻きと左巻き両方なることを指摘する。

山崎真二氏は日本全国の中世期に位置づけられる瓦資料を概観する中で、高麗系瓦にも触れている(山崎二〇〇〇:三八五-四一〇)。先行研究を概観しつつ問題点と課題を指摘し、軒平瓦を重視した検証を行っている。重要な指摘がいくつも見られるが、中でも叩き板の紋様の上下位置関係に関する指摘、平瓦を折り曲げて軒平瓦の瓦当部を製作しているという指摘、軒瓦に押されるスタンプ紋の同范関係とその意味に関する指摘、軒平瓦、軒丸瓦の全長に関する指摘は重要である。また軒平瓦の瓦当部の形状に注目し編年を構築しているが、その根拠として製作技法の独自化、簡素化を挙げている。

上原静氏は高麗系瓦全般について製作技法を検討している(上原二〇〇二a)。軒平瓦については山崎氏の見解と異なり、布を敷いた木范に粘土を足して瓦当部を製作したとする。また瓦当紋様の種類と裏面に補強される粘土の量に差があると指摘している。そして平瓦の製作技法については、逆さ台形の円筒を用いたことを想定している。具体的な系譜に関する言及も見られ、周辺諸地域との比較として、軒丸瓦は瓦当部裏面に円弧状圧痕が確認されると指摘し、李朝期より古い段階における技法の痕跡とする。

これら先行研究で指摘された諸特徴は、後に増加した出土資料の分析でも追認されることとなった

が、再考の余地がある部分も見られる。詳細は後述する。

二一二、年代観

高麗系瓦が含む様々な問題のうち、年代を巡る議論は最も注目されてきた。大きな手がかりとされたのが、瓦の凸面部に陽刻された「癸酉年高麗瓦匠造」銘である(図2)。詳細は後述するが、これは瓦製作時に粘土を叩き締める目的で全体に施された痕跡であり、使われた工具・叩き板に陰刻された文字が転写されたものである。なお転写された銘はこの他にも多数確認されている(図2)が、具体的な年代と「高麗」と記したこの銘が特に注目されてきた。先行研究は一世紀も遡り(田辺泰、巖谷不二雄一九三七)、琉球史学における一〇〇年の命題となっている。

問題となったのは、六〇年周期で巡る十干十二支の表記「癸酉年」がどの年代を指すのかという点にある。これまでに、西暦一一五三年、一二七三年、一三三三年、一三九三年の四つの年代が提示され、議論が続けられてきた。本稿では根拠が明示された研究事例を紹介することとする。

鎌倉芳太郎は浦添城跡・首里城跡を発掘し、二つの可能性を示している(鎌倉一九三七・三八一四一)。発掘の結果、高麗系瓦は明初の陶磁器と共伴することが確認され、また琉球王国と高麗、朝鮮王朝は一四世紀に交流が始まることから一三九三年という年代が導かれるとする。但しこのころ高麗王朝は滅亡しており、瓦工が沖繩へ移民を行った可能性にも言及している。一方で浦添城を発達さ

せたのは英祖王（一二二九～一二九九年）であり、その治世の中から「癸酉年」に該当する年代として一二七三年も候補として挙げている。ここで挙げられた二つの可能性は、前者が考古学と文献史学の成果、後者は文献史学の成果によるものである。また前者は瓦の共伴資料に基づく分析だが、後者は発展期に瓦が葺かれるという前提に立った物証を伴わない類推である。それでもここで提示された論点は後の年代論争において大きな影響力を持ち続けることとなった。

資料の考古学的分析からの見解として、清水信行氏は韓半島の瓦資料との比較から高麗系瓦について言及している（清水一九九八・三九）。清水氏は韓国・開泰寺から出土した銘文瓦と比較し、諸特徴に合わせて「造」「瓦」の字体、また銘文を左の行から読むという叩き板の紋様の特徴から「開泰寺A類」に分類されるものだとする。そして同じA類に分類される開泰寺「己未年」瓦は一三一九年であることから、高麗系瓦の「癸酉年」銘瓦はそれと一番近い年代である一三三三年に該当するとしている。これは両地域の瓦資料同士の比較研究から導かれた初めての成果と評価されている（山崎二〇〇〇・四〇五）。

浦添市教育委員会は浦添ようどれの発掘調査を実施し、出土した高麗系瓦を報告し、年代観を提示している（浦添市教育委員会二〇〇五他）。共伴遺物、理化学分析による年代値の測定、文献資料の記述を根拠に、浦添ようどれは一二七三年に作られ、瓦にはその年代が記されたと結論している。浦添ようどれの調査成果が公表されて後、報告書の「まとめ」を執筆した安里進氏により「癸酉年」を

一二七三年と解釈する論考が内外で発表されている（安里二〇一〇他）。

こうした動向を受け、日本国内の研究者ばかりでなく韓国の研究者からも見解が提示されており、一二七三年説は韓国の研究者には広く受け入れられつつある（済州国立博物館二〇〇七他）。尹龍燮氏は瓦の到来と東アジアの国際情勢を絡めた議論を展開した（尹二〇〇九）。尹氏によれば一二七三年に壊滅した高麗王朝の軍事組織である三別抄が、日本や琉球へ逃亡した可能性は高いとする。そして三別抄が築いた韓国・珍島の龍藏城から出土した軒丸瓦の紋様が琉球の高麗系瓦とよく似ることから、高麗系瓦の「癸酉年」年とは一二七三年のことであり、逃亡した三別抄によって製作技術が持ち込まれた可能性があるとした。安里進氏もまた浦添ようどれの調査成果と龍藏城出土瓦を根拠に高麗系瓦を一二七三年に比定し、さらに浦添城跡の瓦葺きも同時期であるとしている（安里二〇一〇：一四一）。

なお珍島龍藏城の瓦が琉球諸島の高麗系瓦と類似することは他の研究者も指摘してきた。池田榮史氏（池田一九九八）、上原静氏（上原二〇〇二b）は済州島の三別抄と琉球諸島の高麗系瓦の関係に言及している。上原氏は済州島の牧官衙遺跡、缶波頭里三別抄遺跡から出土した瓦資料を見し、琉球諸島の高麗系瓦との比較を行っているが、両者の関係を否定している。なお後年の論考では上原氏はさらに踏み込んで、高麗系瓦は琉球と高麗との積極的な外交による技術伝播であり、韓半島の元朝にとっては日本を意識した政治的な援助であったと指摘している（上原二〇〇七：二一九）。池田氏

は先行研究を踏まえ、一四世紀前半から出現する基壇建物など限られた建造物に高麗系瓦が用いられること、中国陶磁器の編年観を踏まえた考古学的な調査成果から一三世紀末から一四世紀前半代に位置づけられ、一三三三年が最も相応しく一二七三年も考慮に入れなければならない、としている（池田二〇一・一〇二―一〇三、池田二〇一・二三三―二三五）。

また吉岡康暢氏は浦添城と浦添ようどれにおける瓦葺き建物の創建年代と意義について論じている（吉岡・門上二〇一・一三三―三五四―三六二）。高麗系瓦については、浦添ようどれの調査成果を吟味した前述した上原氏（上原二〇〇二b）、清水氏（清水一九九八）の見解を引用して「癸酉年」銘を一三三三年と解釈している。その上で、貿易陶磁器の調査成果から一二世紀後半―一四世紀前半は日朝の官貿易は衰退期だが民間通商は継続していることを指摘し、瓦職人と瓦葺建物の造立技術が中山勢力圏へ移植される際に博多海商が介在した可能性を指摘している。

三、資料の分析

以上のように、これまでの研究は「癸酉年」銘の年代位置づけに大きく偏って展開され、また現在も議論が継続されている状況にある。一方で瓦研究の基本となる製作技法に関する研究は行われてきたものの、議論の余地もまだ残されている。

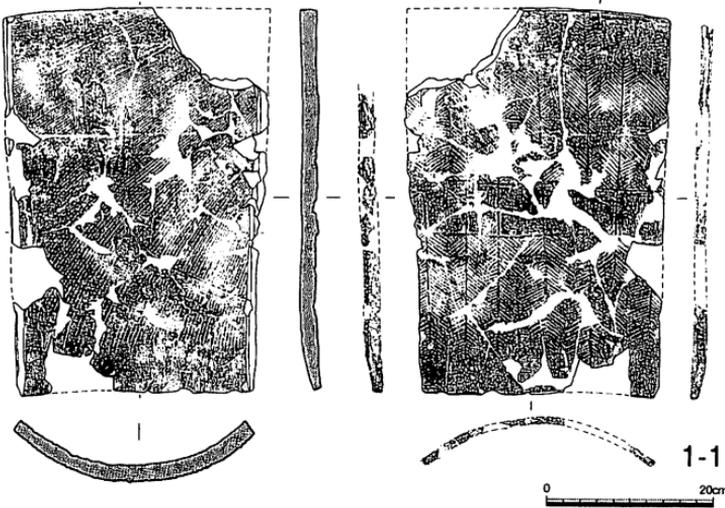
こうした状況を踏まえ、本稿では高麗系瓦を巡る多くの課題のうち、まず遺跡出土資料の考古学的分析を行い、製作技法の検討に着手することとする。なお高麗系瓦は多くの種類から構成されるが、本稿では瓦の主体となる平瓦、丸瓦と、それぞれの軒瓦である軒平瓦、軒丸瓦に絞って取り上げる。その上で、系譜の候補として注目される韓国珍島の龍藏城出土瓦との比較を試み、考古学的手法によって両種の関係性について検討する。以上を踏まえた上で、考察の中で高麗系瓦の年代について取り上げたい。

三十一、高麗系瓦の製作技法

平瓦

平瓦と丸瓦を基本に、多様な瓦を用いる瓦葺き・本瓦葺きは、東アジアを中心に広く分布する。中でも最も多く使用され、屋根全体を広く覆うのが平瓦である(図1)。平面形は台形を呈し、左右両側縁は上へ反り、横断面形は湾曲する。

高麗系瓦の平瓦は還元焼成がなされており、色調は灰色を呈するものを主体とし、明るい赤褐色のもの、黒色のものが確認される。また表面が灰色で芯が黒色、ないし表面が赤褐色で芯が灰色のもの等も確認される。やや軟質である。胎土には白色粒を少量含む。生産していた窯跡は確認されていないが、胎土分析の成果からは沖縄本島で製作された可能性が指摘されている(浦添市教育委員会



1-2



1-3

図3 「癸酉年高麗瓦匠造」銘平瓦 (浦添ようどれ)

二〇〇五・一一三、山本他二〇〇七)。

高麗系瓦の平瓦(図3-1)には、凹面全体に並走しつつ伸びる細い沈線の筋が確認され、粘土塊から瓦の素材として粘土板を切出す際についた切断工具の糸の痕跡・コビキ痕だと推察される。そしてコビキ痕の上になるように布を押し付けた痕跡・布目痕が確認される。こうした布目痕は各地の瓦の凹面にしばしば確認され、瓦の型となる模骨と粘土の間に布を挟むことで粘土の型離れをよくするためのものと解釈される。なお高麗系瓦の布目痕には平瓦の狭端部側より横方向の布の継ぎ目が見られるという特徴がある。

また凹面側は緩やかに屈曲するものの、全体的に滑らかな平坦である。琉球近世瓦の平瓦凹面には縦方向の平坦面が何条も確認され、これは製作時に使用される型・模骨が長方形の板材を組み合わせた桶状であることに由来するとされる。高麗系瓦の平瓦凹面にはこうした桶板の痕跡は認められないことから、用いられた模骨は円筒形ではあるものの表面は滑らかな平坦面を呈すると推察される。

凸面には叩き板の痕跡が確認される。叩き板には紋様が施されており、平瓦の凸面に反転されて転写される。丸瓦と共通するが、平瓦の方が種類は多い。これまでに確認、報告された紋様は、「癸酉年高麗瓦匠造」、「瓦」と読まれる一文字、「大天」(二種類)、「大天」+「月?」、「天」(二種類)、「天」+三文字、その他一種類の計九種類である(図2)。「癸酉年高麗瓦匠造」の「瓦」の字は三画目が見られず、また「造」の字は作りが下線のみの直線で表現され、左側にし字状の紋様要素が加え

られるといった特徴がある（図3-1-1-2）。

左右側面は凹面側に平坦面、凸面側に荒い破面が確認される。平坦面には長軸方向に伸びる筋が確認される（図3-1-2-1-3）。鋭利な刃物を使用して凹面側から切り込みを入れ、切り込みに沿って割り分けた痕跡と推察される。

確認されるこれら諸特徴から、平瓦の製作工程を復元すると以下のようなになる（図5）。

- ① 模骨に布を巻き、粘土塊から切り出した粘土板を布の上から巻きつける。
- ② 叩き板を用いて凸面全体を叩き締め成型する。
- ③ 模骨を外し、布を取る。
- ④ 内側から鋭利な刃物を用いて、粘土板の半分程度まで縦方向の切り込みを入れる。切り込みに沿って割り、平瓦を製作する。

なお穴を設ける平瓦資料が散見される。屋根上で瓦を固定するためのものと推察され、④の後に穿孔されると考えられる。

また平瓦の模骨の置き方については検討の余地がある。韓国の瓦製作法からの類推（山崎二〇〇〇・三八七）、あるいは平瓦の狭端面が素面であり狭端側に反りや膨らみがあること（上原

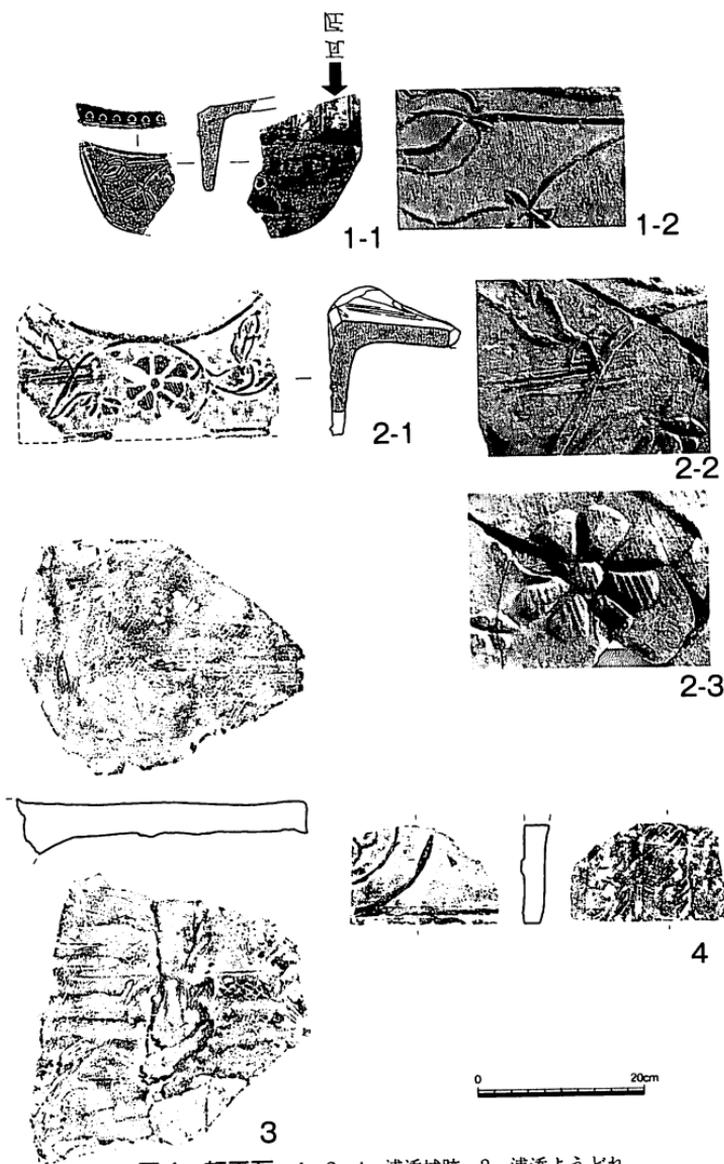


図4 軒平瓦 1、3、4、浦添城跡 2、浦添ようどれ

二〇〇二a・三五)を根拠に、先行研究では幅広の方を上に向けて設置されると解釈されてきた。筆者の観察では出土資料の特徴に製作時の向きについて確認となる特徴を認めることは出来なかった。今後の検討課題の一つである。

軒平瓦

軒先に用いられる平瓦として、装飾となる瓦当部を設けた軒平瓦が存在する(図1)。平瓦を製作した上で瓦当部を作出する工程が加えられる。

高麗系瓦の軒平瓦の瓦当部は横長を呈する。瓦当部の形状は大きく二分され、下端が上端と並行して湾曲するもの(図4-1)と、直線のもの(図4-2、4)が確認される。後者は韓半島の資料には確認されず、琉球諸島の独自性を示すものと推察されている(山崎二〇〇〇・三九一、上原二〇〇二a・三八他)。紋様は蓮華紋と唐草紋が確認され、巴紋、卍紋を持つものもある。

瓦当部は紋様を彫り込んだ型「瓦当范」を用いて製作されたと推察され、同じ瓦当部から作られた同范品も確認され裏付けとなる。同范品の判定には瓦当范についた傷「范傷」が手掛かりとなる。瓦当部には紋様と無関係に左右方向に走る直線的な凸線が多数並行して確認される(図4-2-12)。これは瓦当部が木製であり、木目に沿ってついた特有の范傷が瓦当部の表面に転写されたものと判断される。また范傷が横方向であることから、木目が横になるよう材を取って瓦当部を製作したと推察

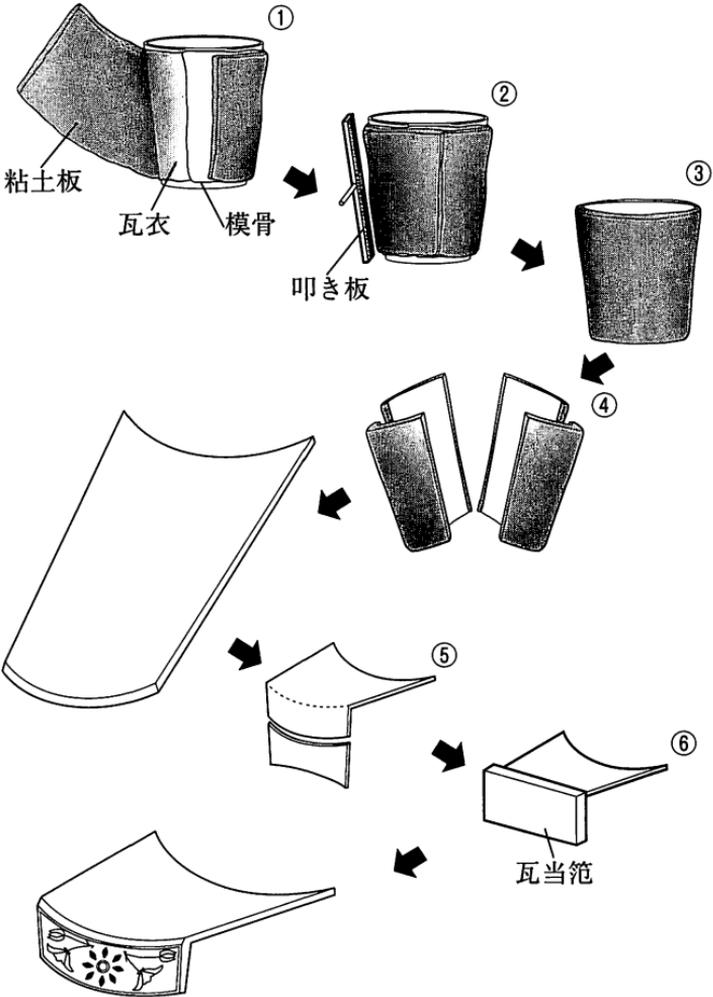


図5 平瓦、軒平瓦の製作工程

される。

軒平瓦の分析において重要な論点となるのが、瓦当部の製作技法である。先行研究は瓦当范を使用することについては一致しているが、軒平瓦の瓦当部の表面に見られる布目の圧痕とコビキ痕（図4-1-1、2、4-1-2-3）の解釈については意見が分かれる。これらの痕跡は前述した範傷の転写痕跡よりも下になっており、瓦当范に押し込む前に既に粘土表面に附着していたと考えられる。山崎真二氏は平瓦の広端側を折り曲げて瓦当部を製作したと解釈し、その根拠として以下の四点を指摘している（山崎二〇〇〇：三八七―三八九）。

- (一) 軒平瓦の瓦当部の布目痕と平瓦部凹面の布目痕の1cm四方内の糸の本数が一致する。
- (二) 平瓦部凹面に「癸酉年高麗瓦匠造」銘の一部（「瓦匠」）が確認される資料が存在する（図4-1-1）。平瓦を見ると銘の部分は狭端部・広端部何れの端に寄ることもなく中央付近に位置することから、瓦当部付近に銘があるということは平瓦と瓦当部をそのまま接合する手法でない。
- (三) 破損した軒平瓦の破面の観察から粘土の折れ曲がり確認できる。
- (四) 折り曲げた際にひび割れやすいと考えられる瓦当部裏面から平瓦部凸面の移行部分に丹念な成型痕跡が認められる。

筆者も概ね同じ立場をとるものであるが、こうした折り曲げ製法を裏付ける根拠としてさらに以下四点を追加できる。

(五) 軒平瓦の瓦当部には紋様の花卉部など大きく突出した部位が存在する(図4-12-13)。布目痕が粘土の型離れを良くするために瓦当部と粘土との間に布を挟んだ痕跡であるのなら、紋様の凹凸が激しい部分では少なからず皺が出来ると推察されるが、そうした事例は確認されない。瓦当部の布目痕やコビキ痕は、瓦当部に粘土を押し込む前に、あらかじめ付いていたと考えるのが妥当であろう。

(六) 後述する軒丸瓦の瓦当部表面には布目痕は見られない。同じく粘土を瓦当部に押し込む手法をとる軒丸瓦に型離れ用の布が使用されないのは不自然であり、軒平瓦の瓦当部表面の布目痕は瓦当部の製作技法とは異なる経緯で付着した可能性が高い。

(七) 平瓦を折り曲げて製作しているのなら、瓦当部裏面には平瓦の凸面に施されるものと同じ叩き板の痕跡があるはずである。多くの資料は瓦当部の裏面に粘土を盛り足して整形するため判然としないが、盛り足された粘土が下端まで達していない資料が存在し、粘土の下に綾杉紋の叩き板痕跡を確認することが出来る(図4-14)。

(八) まとまった数量の資料が報告された浦添ようどれ出土の軒平瓦を見ると、瓦当部の全幅は二七〜三〇cmである。一方、平瓦の推定値を含めた広端幅は何れも三〇〜三四cm、狭端幅は

二六〇二九cmとなっている（浦添市教育委員会二〇〇五・三二一三四）。もし軒平瓦の瓦当部が別作りで平瓦の端部に接合されているのなら、平瓦の広端が狭端何れかと同じ全幅になるはずだが、実際には両者の中間的な長さになっている。軒平瓦の瓦当部の全幅は、平瓦の端ではなく折り曲げられた部位の全幅と一致すると考えれば説明がつく。

但し（八）に示した通り、平瓦の狭端、広端何れの側を折り曲げて瓦当部に整形したのかについては検討の余地があると考ええる。一般に軒平瓦の瓦当部は広端側に設けられ、軒平瓦は平瓦と逆向きに広端側を軒先に向けて葺かれる。ただ狭端側に瓦当部が設けられる資料も無い訳ではない。また一般常識から解釈するより、可能な限り資料の持つ実際の特徴から実証的帰納的に結論すべきと考える。高麗系瓦の軒平瓦は未だ完形資料が確認されていないが、前述の通り平瓦部の凹面に「癸酉年」銘が確認される資料が知られている（図4-1）。完形の平瓦では「癸酉年」銘は狭端側から広端側へ向かう方向となり、他の紋様と逆になる（図3-1）ことから、この軒平瓦資料は狭端側に瓦当部が設けられたと考えられる。²⁾

また平瓦の端部をどれだけ折り曲げて製作したのかについては、軒平瓦の完形資料が未確認であるため即断できない。ただ「癸酉年」銘が瓦当部近辺で確認される資料（図4-1）からすれば、この文字が記される中央付近から折り曲げられたと考えるべきであろう。³⁾ 前述の通り、軒平瓦の瓦当部の

全幅は平瓦の広端狭端の中間的な計測値となっており、この推察を裏付ける。また沖縄県立博物館には瓦当部こそないものの後端が遺存した高麗系瓦の軒平瓦が収蔵されており(図4-3)、全長は一七・四cmを測る。これに瓦当部の厚みを加えるなら概ね二〇cm前後の全長が復元されることになり、平瓦の全長が四〇cm強であることから逆算すれば二〇cm強が折り曲げられたと考えられよう。この概算に従えば、概ね平瓦の中央付近やや瓦当部に使用した部位の方が長めになるよう折り曲げたことになる。ただ瓦当部の高さはせいぜい一〇〜一五cmであるため、瓦当部の粘土素材としては量が多い。立証困難であろうが、瓦当范に収まらない余分の粘土は瓦当部裏面に充填される分として用いられたとも考えられよう。

以上の分析から、軒平瓦は前述した平瓦の製作工程に連続して以下のように製作されると推察される(図5)⁴⁾

- ⑤ 平瓦の狭端部を中央付近から凸面側に向けて折り曲げる。
- ⑥ 折り曲げた部分を瓦当范にはめ込む。余分な粘土を除き、また瓦当部裏面に粘土を足す。
- ⑦ 瓦当范を外し、周縁を整形する。

なお⑦の後に瓦当部に追加の紋様を施す例もあり、スタンプを用いた略三角形の紋様を施した資料

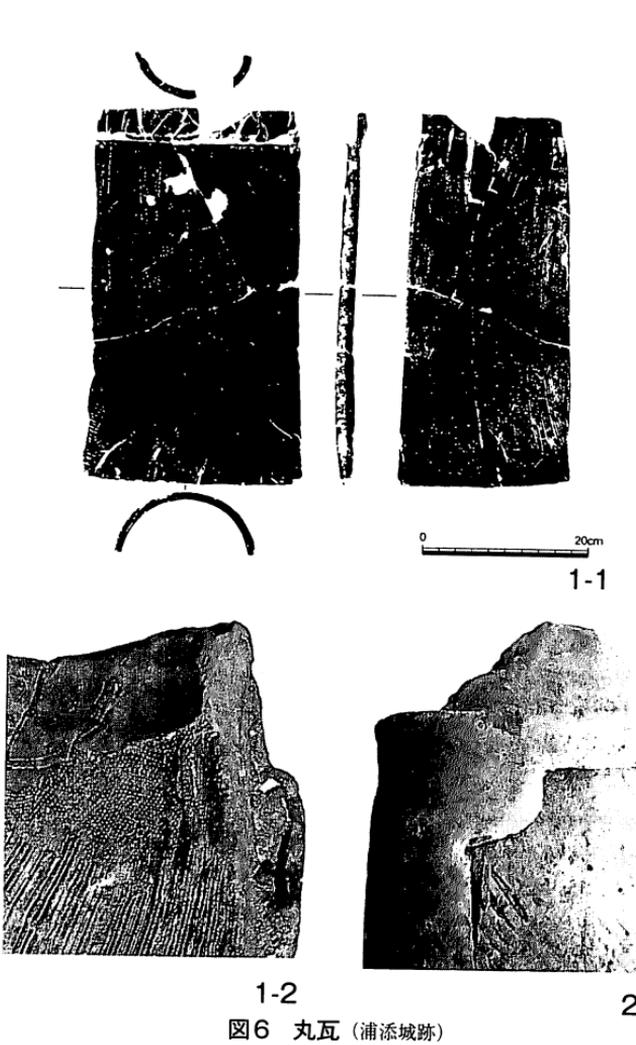
が確認されている（図4-1-1）。また軒平瓦の場合、平瓦部の左右端部の割れ口は平瓦と異なり全面が整形されている。これらの整形作業は⑥か⑦の後に行われると考えられる。

丸瓦

軒先に軒平瓦、屋根全体に平瓦を葺いた後、平瓦の列同士の間に来る隙間に被せて屋根を覆うのが丸瓦である（図1）。半裁された筒形を呈し、後端側には玉縁と呼ばれる段を設けて他の丸瓦の前端部と連結させ、列となす。

浦添城跡からは完形の丸瓦が出土しており、全長は四六・二cmを測る（図6-1-1）。丸瓦の凹面側には、平瓦と同様にコビキ痕、その上に布目の圧痕が全面に確認される。玉縁部の裏側には縦方向の布の皺が転写される例が見られ（図6-1-1-2）、型となる模骨が窄まる部位であることから布が密着しづらいためと推察される。なお玉縁との段となる部分は、帯状の粘土を盛り付けて作出されることと伺える資料が存在する（図6-1-2）。

凸面には平瓦と共通した叩き板の痕跡が確認される。これまでに確認され報告された銘は「大天」（二種類）、「大天」＋「月？」、「天」（一種類）の計三種類と、羽状紋のもの一種類である（図2）。但し叩き板の紋様の上から縦方向のナデ調整が施されるため、前端部付近と玉縁部付近を除きほとんど確認出来ない。また玉縁部には横方向のナデ調整が施される。



左右側面も平瓦と同様であり、凹面側から厚み半分程度まで切り込まれた平坦面が見られ、残りの部分は割り面がそのまま残される（図6-1-1-2）。

以上の特徴から、丸瓦の製作工程は以下のように復元される。(図8)

- ① 模骨に布を巻き、粘土塊から切り出した粘土板を布の上から巻きつける。
- ② 肩部に粘土を充填し玉縁部を製作する。また叩き板を用いて凸面を成型し、その後ナデ調整を行う。
- ③ 模骨を外し、布を取る。
- ④ 内側から鋭利な刃物を用いて、粘土板の半分程度まで縦方向の切り込みを入れる。切り込みに沿って割り、丸瓦を製作する。

軒丸瓦

軒平瓦と対になり、軒先に用いられる丸瓦として前端部に瓦当部が付いた「軒丸瓦」が存在する(図1)。高麗系瓦の軒丸瓦の瓦当部は円形を呈し、蓮華紋が施される。

瓦当紋様は二種類が確認されている。軒平瓦と同様の横方向の範傷も確認され、木製の瓦当範が用いられたと推察される。なお範傷を観察すると、同範でありながら一八〇度逆さに接合された資料が見られる。範傷の場所が一八〇度ずれることから判断される。(図7-1-1、2、2 ○内が範傷)。このことから瓦当範は左右の区別はできるが上下の区別はつかない形状、具体的には長方形を呈してい

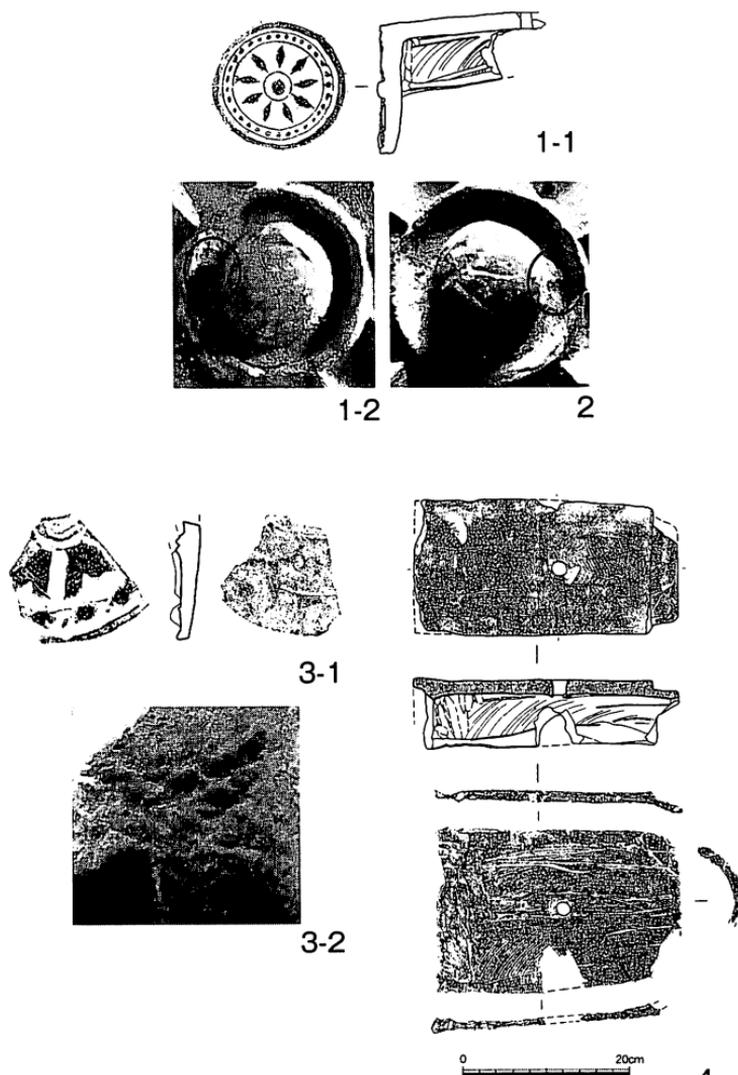


図7 軒丸瓦(2、3、浦添城跡 1、4、浦添ようどれ)

た可能性が指摘出来よう。

また軒丸瓦にも軒平瓦に見られたスタンプ紋様が施される例が認められ、軒平瓦と同じ道具が用いられることが確認される。なお花卉と周縁にスタンプ紋を施す資料は何れの個所にも同じ道具を用いている。

さて軒平瓦は平瓦を折り曲げて瓦当部を製作しているが、軒丸瓦はどうだろうか。軒丸瓦の瓦当部には軒平瓦の様に布目が見られる資料はない。仮に軒平瓦と同じように丸瓦の前端部を折り曲げて瓦当部を製作したとしても、布目痕は瓦当部の裏側となり瓦当部には見られないであろう。また丸瓦の凸側面には叩き板の紋様が施されるがその後ナデ消してしまったため、折り曲げ整形を行ったとしても瓦当部に叩き板の痕跡は残りにくいと推察される。ただ一部の資料には花卉上に叩き板の紋様と推察される痕跡が認められる(図7-3-2)。格子目になっていることから同じ場所に二度以上叩き板が接したと考えられ、偶発的に瓦当部に叩き板が触れて付いたものではないと判断される。

また丸瓦の前端部を瓦当部に使用しているのなら、軒丸瓦の丸瓦部は丸瓦より瓦当部に用いた分だけ短くなるはずである。浦添ようどれからは瓦当部は欠損しているが丸瓦部は完形の資料が出土しており(図7-4)、全長は三一・五cmを測る。一方、前述の通り完形の丸瓦は四六・二cmを測る(図6-1)。軒丸瓦は丸瓦より明らかに短く、丸瓦の前端部約三分の一を利用して瓦当部を作出したという推察の裏付けになると考えられる。⁵⁾なお破面の観察から、丸瓦の前端側を切断して瓦当部の素材

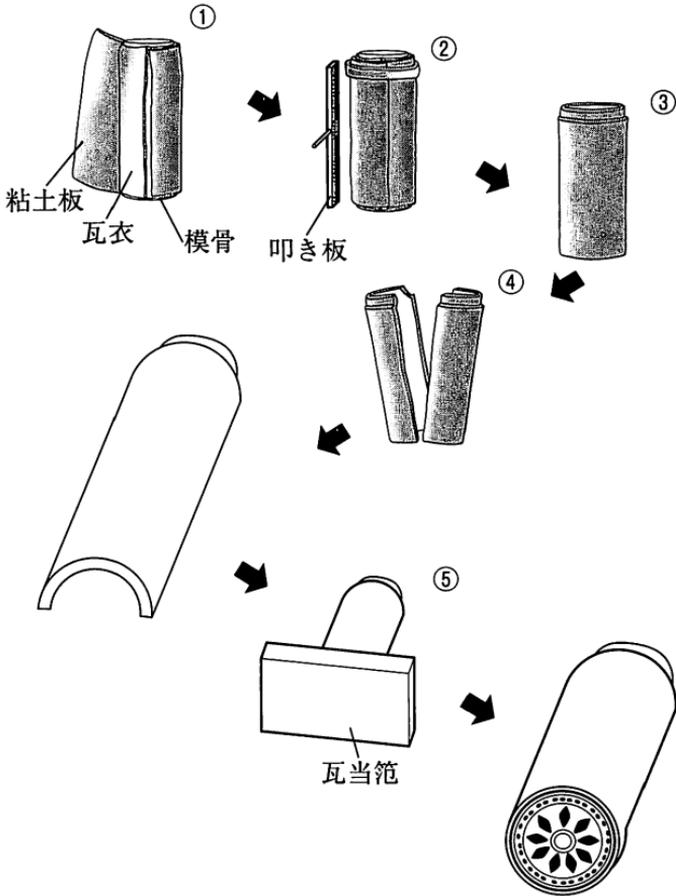


図8 丸瓦、軒丸瓦の製作工程

として利用したと推察される。この点で軒平瓦の瓦当部とは異なる製作技法だと言えよう。

その他の特徴として、軒丸瓦の丸瓦部は左右端部が整形されており、さらに単に平坦にするだけでなく凹面側に向けて傾斜するよう整形されている。また玉縁寄りに釘穴を設ける資料が散見される。こうした特徴から、軒丸瓦は前述した丸瓦の製作工程に連続して以下のように製作されると推察される(図8)。

⑤丸瓦の前端部三分の一を切断して瓦当范に詰め、瓦当部を製作する。裏面に丸瓦をはめ込み、さらに粘土を足す。

⑥瓦当范を外し、周縁を整形する。

丸瓦部の左右端部整形と、スタンプ紋の施紋は⑤か⑥の後に行われると考えられる。

三二、珍島龍藏城資料との比較

琉球諸島のグスク時代の瓦との関係が注目されるのが、韓半島の瓦群である。中でも珍島に位置する龍藏城から出土した瓦は、後述する年代観とも関わって先行研究の中で注目されてきた。

二〇一二年二月一七日、筆者は大韓民国・木浦大学博物館にて龍藏城出土瓦(一九九〇年報告)の

うち、軒丸瓦二点、軒平瓦四点、さらに館内に展示されている軒丸瓦二点、軒平瓦四点を観察した。調査に当たっては鄭仁盛（嶺南大学教授）に仲介の労をお取いただき、嶺南大学の学生諸氏に案内と通訳をしていただいた。学芸員のキムヨンウン氏、キムセジョン氏が立ち合わせ、またチョンインソン氏（嶺南大学 大学院生）、チョンジョン氏（国立扶余文化財研究所 学芸研究員）も調査に立ち合わせた。実見した資料は少数ではあるが、調査成果と報告書の記載を参照しつつ、製作、葺き方、瓦当紋様の特徴に整理し、高麗系瓦との共通点と相違点を確認してみよう。

製作技法

高麗系瓦と龍蔵城出土瓦の製作技法上の共通点として、還元焼成による灰色を呈し、軟質である点が挙げられる。また軒丸瓦の凹面にはコピキ痕と布目痕（図9-5-2）、軒平瓦の凸面には叩き板による紋様（図9-1-2）、軒丸瓦、軒平瓦ともに左右端部には平坦な整形痕跡が確認され、整形工程も共通すると言えよう。なお軒丸瓦の凸面は整形されて叩き板の紋様の有無は判然としないが、整形を加えるという点では広義の共通性を有すると判断することも出来るだろう。また瓦当範の範傷は横方向に伸びる木質特有のものであり（図9-5-4）、材質、材のとり方において共通する。

一方で相違点も確認される。琉球諸島の高麗系瓦の軒平瓦は平瓦を折り曲げて瓦当部を製作する。しかし龍蔵城の軒平瓦（図9-1-4）は、瓦当範に粘土を詰め、平瓦を埋め込んで接合しさらに瓦

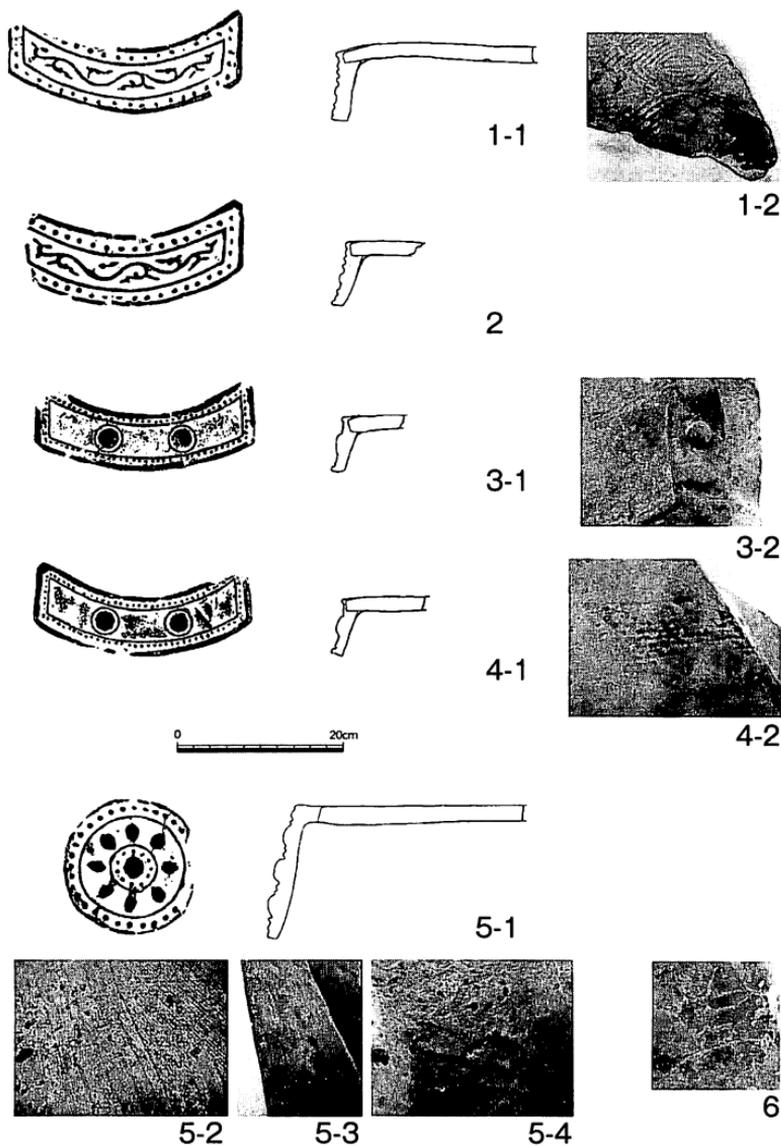


図9 珍島龍蔵城出土軒平瓦、軒丸瓦 (1~4、軒平瓦 5、6、軒丸瓦)

当部裏側に粘土を盛り付けて成型したとされる。また日揮紋の瓦当紋様を持つ資料(図9-3、4)にのみ、瓦当部上面にヘラを用いた調整の痕跡が認められる。こうした整形痕跡は高麗系瓦には見られない。

叩き板の紋様も異なる。今回実見した軒平瓦四点の凸面側には同一種の叩き板が確認される。琉球諸島の高麗系瓦は直線からなる綾杉紋が施されるが、龍蔵城の瓦に見られる叩き板の紋様は直線と曲線が組み合わさって構成される(図9-1-1、2)。なお平瓦の凹面は全体に横ナデ調整が施され、布目やコビキ痕といった製作痕跡は一部を除き確認されない(図9-4-1、2)。この点でも琉球諸島の高麗系瓦とは異なる。

また高麗系瓦の軒丸瓦は、左右端部を単に平坦にするだけでなく凹面側に向けて傾斜するよう整形される。しかし龍蔵城の瓦にはこうした成形は認められない。

この他、製作集団を反映し得ると考えられる特徴として、龍蔵城の軒丸瓦の玉縁部には文字がヘラ書きされるものがある(図9-6)⁶⁾。こうした事例は琉球諸島の高麗系瓦には見られない。

規格

瓦の規格すなわち諸特徴の採寸は、瓦を屋根に葺く際や製作用具の準備に当たり重要な意味を持っている。高麗系瓦と龍蔵城出土瓦の両者を比較してみよう。

先ず興味深い共通点として、両者の規格の一致が挙げられる。実見した資料および報告書によれば、龍藏城の平瓦は全長約四〇cm、全幅三〇cm、丸瓦は全長約四五cm、全幅一六cmの規格である。これは琉球諸島の高麗系瓦とはほぼ一致する。

また瓦を屋根に葺くに当たっては、隙間を埋め固定するためにしばしば漆喰が用いられる。龍藏城では軒平瓦の瓦当部右側に、漆喰と推察される白色物が附着している。軒丸瓦の瓦当部裏面と軒平瓦の瓦当部表面との間の隙間を埋めるために盛り付けられた漆喰だと推察される。また軒丸瓦の丸瓦部には漆喰の痕跡は見られないが、左右両端には他の部位と比べて風化していない部分が帯状に分布しており、漆喰が塗布されたことで風化を免れた範囲だと考えられる。

相違点としては、軒丸瓦の接合角度が挙げられる。龍藏城では直角のものと約一〇〇度に接合されるもの(図9-5-1)の二種が確認されるが、琉球諸島の高麗系瓦は直角に接合されるものばかりである。また表面成型を見ると、龍藏城では軒丸瓦は凸面、軒平瓦は凹面が平滑にナデ調整されている。屋根上で表出する部位であることから建築景観に配慮したものと推察される。琉球の高麗系瓦は丸瓦の凸面のみが整形され、また軒丸瓦の丸瓦部には屋根に固定するために釘や紐を通したと推察される固定用の穴が設けられるが、龍藏城の軒丸瓦には見られない。

この他の相違点として、種類の相違が挙げられる。琉球諸島の高麗系瓦には、丸瓦、平瓦、軒丸瓦、軒平瓦の他に、有段式平瓦、雁振瓦、鬼瓦等が浦添城跡、首里城跡で出土している。なお鬼瓦の

表現は一つ角となっており、日本の影響が示唆されている（上原一九九六…三二六）。こうした種類の瓦は今のところ龍藏城では確認されていないようだ。

瓦当紋様

高麗系瓦の瓦当紋様については何れ稿を改めて論じるつもりであるが、龍藏城出土資料と関係する部分のみ限定して取り上げる。

高麗系瓦と龍藏城出土瓦の共通点のうち、最も注目されてきたのが軒丸瓦の瓦当紋様の類似であった（図7-1-1、図9-5-1-1）。両種ともに中心に子房と圏線が配置され、その周囲には先端の尖る花卉が巡る。各々の紋様要素の形状と配置は両者に共通する特徴だと言えよう。

一方、微細に見ると相違点も確認される。龍藏城出土資料の軒丸瓦の瓦当紋様（図7-1-5）は八枚の花弁を持つが、琉球諸島の高麗系瓦（図5-1-3）は九枚である。また高麗系瓦には先端が二つに分かれるハート形の花弁を持つものが確認される（図5-1-5）が、龍藏城には見られない。軒平瓦の瓦当部はさらに大きく異なっており、龍藏城の資料では日揮紋と忍冬紋が確認される（図7-1-1、4）が、高麗系瓦（図3-1-2、3、4）と共通するものは見られない。

四、考察

琉球諸島の高麗系瓦の製作技法を検討し、さらに珍島龍藏城出土瓦との比較を試みた。本稿での分析成果をまとめてみよう。

四―一、高麗系瓦の詳細と系譜

琉球諸島の高麗系瓦の諸特徴、中でも製作技法について検討した。製作技法は瓦生産に関わった瓦工達を反映すると予想される。議論のある課題についてそれぞれの妥当性を検証するとともに、新知見も提示することが出来た。

そして本稿の分析によって明らかになった高麗系瓦の諸特徴と製作技法は、珍島龍藏城出土高麗瓦と比較した時、多くの相違点が確認される。これは両者が直接結びつけられないことを示していると考えられる。

一方、両者の間には共通点も存在する。中国を起源とする東アジアの瓦は基本的な製作技法において広く共通することから、全ての共通点が両者の近縁性を積極的に支持するものとは言えない。但し

・平瓦、丸瓦の製作工程

・平瓦、丸瓦の規格

・軒丸瓦の紋様構成

の三点は、中華的瓦文化のもつ共通性だけでは説明がつかないと考えられる。技術者の移動、あるいは琉球諸島と韓半島の瓦工人たちの間で技術やデザインにおいて交流があったことを示唆していると考えられよう。

これらの共通点と相違点を合わせて考えた時、どのような歴史的展開が導かれるであろうか。まず相違点の評価から、「珍島龍藏城の瓦を手掛けた瓦工人が沖繩本島で高麗系瓦を製作した」という、両者を直接結びつけた主張を支持することは難しいと言えよう。一方で共通点の評価から、両者を製作したそれぞれの工人の間に瓦について共通の了解が存在していたことはうかがえる。珍島の瓦を製作した瓦工集団と同様の製作技法や規格、紋様のデザインを用いる別の瓦工集団が存在し、琉球諸島へと瓦を伝えたと考えるのが妥当であろう。珍島龍藏城出土瓦、沖繩出土の高麗系瓦の両種はいわば祖先を共有する水平関係にあると考えられる。

四―二、高麗系瓦の年代

高麗系瓦と珍島龍藏城の瓦群との直接関係が否定されるなら、高麗系瓦の年代はどのように考えら

れるだろうか。この年代論争、具体的には「癸酉年」銘の解釈は琉球史研究における長年の命題とされてきた。先行研究の流れをみると、一二七三年、一三三三年、一三九三年説が有力な候補として議論されており、一九八〇年代の浦添城跡の発掘調査報告を契機に一四世紀代とする見解が提示されたが、二〇〇〇年代に浦添ようどれの報告がなされると一三世紀代すなわち一二七三年説が再び主張されるようになっていく。

そしてこれまでの年代に関する研究は遺跡の評価と文献史料に見られる政治的動向からなされたものが多かったが、近年は年代の判明する資料との比較から高麗系瓦の年代を決定する動きも盛んである。前述した安里氏、尹氏は珍島龍藏城の瓦資料（尹二〇〇七、安里二〇一〇）、清水氏は韓国・開泰寺から出土した銘文瓦との比較（清水一九九八）から、それぞれ主張を展開してきた。前者は紋様の共通点、後者は銘文の共通点を積極的に評価し、年代上の一致を意味するものとして高麗系瓦の年代を決定する内容が主である。筆者は、前述の通り紋様に相違点もあることから、前者の主張は成立しがたいと考える。また後者については、叩き板の紋様（綾杉紋と字体）と厚みの近似が主な根拠とされるが、年代の類推を導いた資料に凸面の端縁部をナデ調整する技法が確認されるなど高麗系瓦には見られない相違点をどう解釈するかという課題が残されること、そして平瓦の分析のみからの主張であり他の器種も含めた検証が望まれる。また池田榮史氏はこれら遺物研究の成果と合わせて出土陶磁器と基壇建物の登場を根拠に加えて一四世紀前半に遡る可能性を指摘している（池田二〇一一、池

田二〇一二)が、堅牢な基壇建物は重量物である瓦葺きには有利な建築構造ではあるものの、基壇建物でありながら瓦葺きでない今帰仁城跡の事例を見る限り、基壇建物の登場と瓦の登場を必ずしも同一視出来ないと考える。

高麗系瓦の年代の検証には、多くの瓦を出土した遺跡の分析が重要であろう。但しこれまでに確認された高麗系瓦の出土遺跡は消費遺跡であり、刻印された「癸酉年」が指し示す生産年代を突き止める直接の手掛かりとはし難いことをよく念頭に置く必要がある。それでも、多くの高麗系瓦資料を出土し、まとまった調査報告がなされた遺跡の分析が重要であることに変わりはない。高麗系瓦の年代の解釈に当たっては、一三世紀説の論拠ともなった浦添ようどれの発掘調査成果、中でも瓦溜まりの解釈(浦添市教育委員会二〇〇五・一一一―一一六)が重要な意味を持つことになるだろう。本稿では改めてその論旨の詳細を確認する。

報告書によれば、検出された瓦溜り遺構は老朽化した初期浦添ようどれの施設廃材を焼却した跡と考えられている。これは一四世紀末―一五世紀前半に行われた浦添ようどれの石積み工事に伴う遺構であり、内容物は一括廃棄された遺物と判断されている。遺構では一三世紀に位置づけられるとされる花菱形笠鉾が瓦と共伴している。また遺構内の炭化物の理化学的年代測定では一三―一五世紀前半の結果が得られている。⁽⁷⁾そして『琉球国由来記』によれば浦添ようどれは咸淳年間(一二六五―七四四年)に造営されたと記述される。これら考古資料、測定された年代、文献史料から、出土した瓦に見

られる「癸酉年」銘は一二七三年が該当し、浦添ようどれは一二七三年に作られ瓦にはその年代が記されたと結論している。

この解釈において注意を要するのは、遺跡や遺物、測定値が示す年代観は高麗系瓦の「癸酉年」を一二七三年と解釈することを妨げない、という結論であるという点である。調査によって提示された年代は一三世紀から一五世紀前半までの範囲に大きくばらつく。そして花菱形笠鉢、高麗系瓦をはじめ瓦溜まりで共伴する遺物は、廃棄された時期が一致することを示しているとは考えられようが、使用開始年代の一致まで保証するものではない。特に耐久年数の長い瓦は廃棄年代と生産年代を同一視できない。そして生産年代であるはずの「癸酉年」銘が一二七三年であるという結論は、あくまで浦添ようどれの造営年代が瓦に記された、という仮説に立脚するものである。発掘調査成果は瓦の年代を一二七三年とする説を積極的に指示するものではないと考えるべきであろう。

そして浦添ようどれが墓であったという点も注意する必要がある。浦添ようどれ西室内では建物礎石と瓦が発掘されており、瓦葺き建物一棟が存在したと考えられている。墓に瓦葺きが存在する意味として想定されるのは、高貴な被葬者にふさわしい墓として装飾するためと考えられよう。一方、近隣の浦添城跡では瓦葺き建物の登場は一四世紀後半から一五世紀初頭頃とされており（浦添市教育委員会一九八四・四四）、双方の年代観の通りであるならば、墓である浦添ようどれの方が王城である浦添城より先に瓦葺きとなったことになる。もちろん王城が先、墓が後という順序は推察であり、ま

た「墓に建てる瓦葺き」が外来の慣行として持ち込まれたのなら、城郭の瓦葺きを待つことなく墓に瓦葺き建物が建てられたという想定も成立しないではないが、物証に積極的に裏付けられる事実として提示された年代ではないことから慎重な検討が必要である。むしろ王城が瓦葺きとされたことを踏まえて瓦葺きの墓が建築されたという文脈の方が理解し易いであろう。

浦添城跡と浦添ようどのれの調査成果を比較した時、もともと整合し蓋然性が高い高麗系瓦の「使用」年代は、浦添城跡に瓦葺き建物が建設された一四世紀後半以降だと考えられる。刻印の示す「生産」年代は「使用」年代以前と考えられ、最も近い年代は一三三三年ということになるが、一四世紀前半まで確実に遡る出土状況の高麗系瓦は未だ報告されていない。⁸⁾

五・小 結

琉球史研究の大命題として現在も議論が続く高麗系瓦について、主に考古学的な観点から述べてきた。龍藏城出土資料とは水平関係、例えるなら親子ではなく兄弟か従兄の関係にあると言えらるう。両者の始祖を検討する作業は両地域の考古学者が共同して追究していくべき今後の課題である。なお先行研究では軒瓦の瓦当紋様を手掛かりにした分析研究が注目されている。韓半島でも一三〇一五世紀代の瓦資料の蓄積は進行しており、「中央の珠紋の周りに菱形の花弁が配置され、さらに圏

線が巡る」という高麗系瓦に見られる紋様構成は、龍藏城出土資料以外にも類例を確認することができる。

またここでは年代の問題も大きく横たわる。高麗系瓦が一四世紀後半に「使用」されていたことは確認されるものの、一部の資料に記された「癸酉年」銘の指し示す「生産」年代を文献史学の示す候補の何れか一つと整合させることは現時点では出来ていない。様々な議論がなされるものの、これが考古学的分析の現状であると考ええる。整合しない、という可能性も視野に入れつつ、今後も研究蓄積が課題となる。

規格や素材の製作技法については、より広い範囲で考察する必要がある。瓦の規格は各生産地、生産者が独自に設定していたとは考えにくく、一定の地理的・時間的まとまりの中で統一された規格を用いると推察される。韓半島、琉球諸島の瓦全体に確認される規格なのか、あるいは特定地域にのみ限られる規格なのか、完形状態の復元と計測作業の積み重ねによって規格の在り方が追究される必要がある。

本稿では瓦の製作技法について詳述し、瓦当紋様の詳細な図像分析に関しては分量の問題から割愛した。また分布論、生産と流通、瓦葺き建物の存在意義など、高麗系瓦を巡る論点はまだまだ多いが、何れ稿を改めて述べることにする。

【引用・参考文献】

〈論文〉

- 安里進 二〇〇四「琉球王国形成の新展望」『シンポジウム 中世の系譜―東と西、北と南の世界』帝京大学山梨文化財研究所…八五―九七
- 安里進 二〇一〇「第六章 王のグスクと王陵」『沖縄県史 各論編 第三卷 古琉球』…一三四―一五三
- 新城徳祐 一九八七「干支入 琉球歴史年表」
- 石井龍太 二〇〇八「溶姫御殿と幕末近世瓦 ―瓦文化と近世アジア世界―」『江戸遺跡研究会会報』江戸遺跡研究会、No.112: 二―三
- 石井龍太 二〇一〇「島瓦の考古学 ―琉球と瓦の物語―」新典社
- 池田榮史 一九九八「物質文化研究からみた韓国済州島と琉球列島 ―高麗時代を中心として―」『琉大アジア研究』第二号、琉球大学法文学部附属アジア研究施設…一―一〇
- 池田榮史 二〇一―「沖縄における高麗瓦研究と今後の展望」『平成20年度～平成24年度文部科学省特別教育研究経費「人の移動と21世紀のグローバル社会」韓国研究班調査研究報告書 第3冊 平成22年度調査研究報告書』…九七―一〇六
- 池田榮史 二〇一二「第一章 琉球列島と韓半島 ―物質文化交流・交易システムの解明―」津波高志編『琉球大学 人の移動と21世紀のグローバル社会Ⅴ 東アジアの間地方交流の過去と現在―済州と沖縄・奄美を中

心にして』：三二五―三四六

尹龍燦 二〇〇九「오키나와 출토의 고려 기와와 삼별초」『韓國史研究』147、韓國史研究会…一五九―一九七

上原静 一九九五「琉球古瓦の雁振瓦について」『南島考古』15、沖繩考古学会…六三―七二

上原静 一九九六「首里城跡の高麗系瓦と大和系瓦 ―西のアザナ地区の資料―」『文化課紀要』第12号、沖繩県教育庁文化課…一―四〇

上原静 一九九七「大和系古瓦とその分布の事情」『読谷村立歴史民俗資料館紀要』第21号、読谷村立歴史民俗資料館編…六三―七八

上原静 一九九八a「琉球の古瓦」『考古学ジャーナル』427、ニュー・サイエンス社…九―二三

上原静 一九九八b「琉球諸島出土の中・近世瓦の研究略史」『地域文化論争』第1号沖繩国際大学大学院地域文化研究科…七―九六

上原静 二〇〇〇a「沖繩諸島出土の古瓦と造瓦技術の伝播」『第9回アジア史学会研究大会（沖繩大会）報告講演・シンポジウム アジアの中の沖繩』アジア史学会…一三七―一四八

上原静 二〇〇〇b「古瓦からみた琉球列島の交流史」『古代文化』52（3）、古代学協会…三九―四三

上原静 二〇〇〇c「沖繩諸島のグスク時代における瓦の需要」『読谷村立歴史民俗資料館紀要』第24号、読谷

村立歴史民俗資料館編…二一―四一

- 上原静 二〇〇二a 「沖繩諸島出土の高麗系瓦について」『読谷村立歴史民俗資料館紀要』第26号、読谷村立歴史民俗資料館編…二二—四一
- 上原静 二〇〇二b 「沖繩諸島における高麗系瓦の系譜——韓国濟州島出土の高麗瓦との比較——」『南島文化』第24号、沖繩国際大学南島文化研究所…四九—六一
- 上原静 二〇〇七 「沖繩諸島の高麗系瓦」『図録 耽羅と琉球王国』濟州国立博物館…二一六—二一九
- 上原静 二〇一三 「明朝系瓦と琉球近世瓦の名称」『壺屋焼物博物館紀要』那覇市立壺屋焼物博物館…一—一
- 大川清 一九七八 「一九六二」『琉球古瓦調査抄録』『沖繩文化財調査報告（一九五六—一九六二年）』沖繩県教育庁監修…三九〇—四一一
- 大川清 一九七四 「古瓦」日本歴史学会編『日本考古学の現状と課題』吉川弘文館…三六六—三九二
- 鎌倉芳太郎 一九三七 『南海古陶器』寶雲舎
- 小渡清孝 一九八六 「第五章 浦添の古瓦」『浦添市史』第六卷、浦添市史編集委員会…一七三—二〇六
- 濟州国立博物館 二〇〇七 『図録 耽羅と琉球王国』
- 清水信行 一九九八 「韓国論山郡開泰寺出土銘文瓦についての一考察」『日本考古学』第5号、日本考古学会…一九—四六
- 下地安広 一九八六 「高麗系古瓦の製作技法考察（一）——浦添城跡出土の瓦を中心として——」『南島考古』一〇、沖繩考古学会…四二—五四

- 下地安広 一九九〇「高麗系古瓦について」『考古学ジャーナル』320、ニュー・サイエンス社…一八一—二三
- 関口広次 一九七六「沖縄に於ける造瓦技術の変遷とその間の事情——勝連城本丸跡出土古瓦を中心として——」『考古学雑誌』第62巻第3号、日本考古学会…三八—五五
- 瀬戸哲也 二〇一一「中世後期の琉球における仏教事情——考古資料からの検討——」『博多研究会誌 20周年記念特別号』博多研究会…一三一—二八
- 高元政秀 一九七二「沖縄における原始社会の終末期」『南島史論・富村真演教授還暦記念論文集』琉球大学史学会…三四七—三六四
- 田辺泰・巖谷不二雄 一九三七『琉球建築』座右寶刊行会
- 多和田真淳 一九七八〔一九六二〕「琉球列島における遺跡の土器、須恵器、磁器、瓦の時代区分」『沖縄文化財調査報告（一九五六—一九六二年）』沖縄県教育庁監修…二九三—三〇三
- 渡久地龍雲 一九九一「書と風土 高麗瓦の左文字銘文について」『地域と文化』第六六号…九—一
- 西谷正 一九八一「高麗・朝鮮両王朝と琉球の交流——その考古学的研究序説——」『九州文化史研究所紀要』第26号、九州大学九州文化史研究施設…七五—一〇〇
- 外間正幸 一九六一「琉球の梵鐘について」『沖縄文化財調査報告』…二六四—二九二
- 真喜志瑤子 一九八四「琉球極楽寺と円覚寺の建立について（一）——本土との交流の二つのかたち——」『南島史学』第27号、南島史学会…二六一—四七

松本雅明 一九七二『沖縄の歴史と文化：国家の成立を中心として』近藤出版社

三島格 一九八〇『琉球の高麗瓦など』『鏡山猛先生古希記念古文化論叢』：七八九―八一〇

山崎信二 二〇〇〇『奈良国立文化財研究所学報 第59冊 中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所

照屋善義・花城可英・与座範弘・宜野座俊夫 一九八八『首里城古瓦等の理化学的研究』『沖工試業務報告』第

一六号：五一―七五

山本正昭・上田圭一・矢作健二・石岡智武 二〇〇七『首里城跡御内原西地区発掘調査出土瓦の胎土分析とその

検証』『沖縄埋文研究』五：七七―一〇

吉岡康暢・門上秀毅 二〇一一『琉球出土陶磁社会史研究』真陽社

渡辺誠 一九九〇『適水瓦の製作技法について―韓国における考古民族学的研究・IV―』名古屋大学文学部編

『名古屋大学文学部研究論集 史学』三六：一三一―一四八

〈報告書〉

浦添市教育委員会 一九八四『浦添城跡第二次発掘調査概報』

浦添市教育委員会 一九八五『浦添城跡発掘調査報告書』

浦添市教育委員会 二〇〇一『浦添ようどれⅠ』

浦添市教育委員会 二〇〇五『浦添ようどれⅡ 瓦溜り遺構編』

浦添市教育委員会 二〇〇七『浦添よどれⅢ 金属工房跡編』
崔盛洛 一九九〇『珍島龍藏城』木甫大学校博物館
那覇市教育委員会文化財課 二〇一二『渡地村跡 臨港道路那覇1号線整備事業に伴う緊急発掘調査報告』

図の出典

- 図2 浦添市教育委員会二〇〇五…二二
図3 1-1 浦添市教育委員会二〇〇五…四四
図4 1-1 山崎二〇〇〇…三八八、二-1 浦添市教育委員会二〇〇五…三八
図6 1-1 浦添市教育委員会一九八五…一二六
図7 1-1 浦添市教育委員会二〇〇五…三六、4 浦添市教育委員会二〇〇五…三七
図9 1-1 崔一九九〇…一〇三、2 崔一九九〇…一〇三 3-1 崔一九九〇…一〇五、4-1 崔一九九〇…一〇五、5-1 崔一九九〇…一〇七

※他の図版、表は筆者が作成した。図4-3、図4-4、図6-2、図7-2、図7-3 沖縄県立博物館

所蔵資料

【注】

(1) 山崎信二氏は「大和系瓦」という用語について、大和⇨奈良県と誤解されやすく、研究の混乱を招く危険性を指摘し「九州系瓦」という呼称を提示している(山崎二〇〇〇…三九六)。

(2) なお山崎氏は「通常の軒平瓦」と異なるという理由からこの資料だけ例外的に上下逆向きとなったという所見を提示している(山崎二〇〇〇…三八九)が、現在の資料状況から演繹的に解釈するならば、やはり狭端側に瓦当部が設けられたとすべきだろう。またこの結論は、瓦当部を取り付ける製作工程において平瓦と瓦当部がどのような位置関係になるかまで含めて問題になる可能性を含んでいる。

(3) 山崎氏は完形の軒丸瓦の全長が三二cm前後であることから、「通常の軒平瓦」ならば同じ全長になると類推しており、平瓦の全長が四三〜四六cmであることから二二〜一五cmが折り曲げられ瓦当部に整形されたとしている(山崎二〇〇〇…三九三)。しかし本稿で論じた通り、「通常」を前提に例外と解釈するこの結論には再考の余地がある。

(4) 浦添ようどれ瓦溜まり編には折り曲げ製法に関する指摘があるが、結論には慎重である(浦添市教育委員会二〇〇五…二〇)。高麗系瓦を出土した那覇市渡地村跡の報告書では折り曲げ製法との見解をとっている(那覇市教育委員会二〇一二…三三五)。

(5) 山崎氏は瓦当部と丸瓦を接合したという見解を示しており、また軒平瓦の全長に合わせて別に短い模骨が用意され、軒丸瓦を短く製作したとしている(山崎二〇〇〇…三九二―三九三)。ただ前述の通り、軒平瓦

は山崎氏の想定よりさらに短いと考えられる。

(6) 多様な叩き板が用いられる高麗瓦の場合、叩き板の紋様が製作にあたった工人を表すのならば敢えて窯印を入れる必要はないようにも思われる。しかし丸瓦や軒丸瓦の場合、凸面側に記される叩き板の痕跡をナデ消してしまったため、製作した工人や窯が分かるように敢えて書き入れる必要があるとも考えられる。ただこの窯印は叩き板の紋様と同じ文字・紋様とは考えにくく、この推察には不利である。なお今回実見した軒平瓦にはこうした窯印は確認できなかった。

(7) ちなみにここで炭素年代測定が示す年代は、施設廃材が焼却された年代ではなく、用材となる樹木が伐採された年代である。従って浦添ようどれの造営年代より古い年代が示されていると考えるべきである。また年代のばらつきは様々な由来の材が埋積したためとされる(浦添市教育委員会二〇〇五・八五)。

(8) 瓦は使用期間全体に渡って破損し廃棄され続けることから、廃棄年代も生産年代も最初の時点では重複することになると考えられる。生産地から消費地への運搬、あるいは備蓄など生産から供給までのタイムラグは想定されるものの、最古の消費年代を追究することで間接的に最古の生産年代を推察出来ることになる。一四世紀前半に位置づけられる出土状況の高麗系瓦が今後報告されるのかどうか、資料蓄積が注目される。

(9) 瓦はしばしば大量に必要なことから、複数の窯から瓦を集めなければ施工できない事態も生じ得る。そうした事態に対応するため、供給が想定される範囲内で規格を統一する必要がある。実際、江戸の棧瓦の規格は地域ごとに一定のまとまりをもつことが確認されている(石井二〇〇八)。